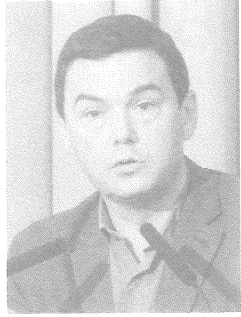


なるほど 探訪

フランスの経済学者トマ・ピケティ氏の著作『21世紀の資本』が、世界で150万部、日本でも13万部と、経済書としては異例の売れ行きです。ブームの周辺を探りました。(清水博)



ピケティ氏

「日本でもこの数十年、格差が増大し、低成長でも上位10%の所得は3割も増えました。代わりにそれだけ実質購買力を減らした人がいるとい

ピケティブーム



ピケティの著書と関連本

『21世紀の資本』 近現代200年間の欧米諸国の経済格差の実態を、膨大な税務記録から復元。

資本主義社会では格差拡大が続いていることを示し、資産への累進課税などを提唱。

格差社会なぜ 考える流れに

「一緒に買う人が多い」(東洋経済新報社)、「ピケティの本へも見解も語るピケティ氏。来日直後のシンポジウム(1月28日夜、東京・有楽町朝日ホール)は、平日にもかかわらず700人の定員に10倍もの応募が殺到しました。ピケティ氏の新聞連載時評を集めた『トマ・ピケティの新・資本論』(日経B.P.社)が6万部、池田信夫著『日本人のためのピケティ入門』(東洋経済新報社)が11万部、竹信三恵子著『ピケティ入門』(金曜日)が7万部と関連書籍も好調です。どんな人が読んでいるのか。



『21世紀の資本』を手にもんだ。猫町倶楽部の東京読書会の1コマ(21日、東京都内)

各地で読書会を運営する猫町倶楽部の『21世紀の資本』東京読書会を訪ねました(21日)。約60人の参加者が9台のテーブルに分かれてグループ討論をしている中に失礼し、「なぜ、この本を読もうと思ったのですか」と聞きました。

「はまっているからだが経済学も学びたかった」(30代男性・東京都・営業職)など、聞いた12人中4人が経済学への興味をあげました。「子どもの貧困に向き合う仕事をしたい、経済全体のことを知らなければと思った」(35歳男性・東京都)など、仕事をきっかけに関心を持った人も多い。

「昨年、新聞のピケティ氏インタビューで本のことを知り、日本語版が出たら読もうと思っていた。各国の格差の歴史を200年の長期でたどるデータなど、初めてみた」(39歳女性・神奈川県・会社員)

ピケティ氏の著書で、経済格差などの現実を深く考えようとする流れが、確かに広がったようです。

文化の話題

きじま・あきら 1962年横浜市生まれ。詩集『点描画』。詩人会議、日本現代詩人会、横浜詩人会各会員。

産卵

今月の詩

神膏の丘から見おろす
美しい入り江に

うきうきと投げ込まれるコンクリートの塊。
そのとき聞こえた叫びは
私たちのものだったのか
サンゴのものだったのか
一年をかけて数センチ

このときを待たずに
人のいのちもまた。

10トンを超えるコンクリート塊が
くだかれ、つぎつぎと、何層も打ちすえられ。
こんな理不尽な打ちすえの音
ふたたび戦争に回かおひびいてくるか

木島 章

それでもサンゴたちは
怒りや憎しみさえも
生きる力にかえて
じつとこのときを待っている。

毎年いちど、満月が巡る
サンゴたちは
いつせいに卵をほそげ
数えきれないいのちの瞬き

入り江中の海水を紅がら色に煙らせのこぼし。